

笑いで人をつなぐ：デジタル国際交流における小噺活動の可能性
Kobanashi Across Borders: Humor as a Bridge in Digital Intercultural Exchange

西村裕代, イェール大学
Hiroyo Nishimura, Yale University
大久保範子, Knox English Network, NPO
Noriko Okubo, Knox English Network, NPO

1. はじめに

ユーモアは人間関係の円滑化やストレス軽減に有効であることが古くから指摘されており、近年は心理的・身体的ウェルビーイングへの効果も実証されつつある。(Martin et al., 2003; Martin, 2007; Morreall, 2009)。

加えて 1990 年代以降、グローバル化の進展とともに欧米を中心に、国際的な視野を持つ教育の重要性が注目されてきた。とりわけコロナ禍以降は、デジタル技術の急速な発展と個々の Information and Communication Technology (ICT, 以下 ICT) リテラシーの向上により、オンラインを活用した国際交流の機会が飛躍的に拡大していることが指摘されている(経済協力開発機構 [Organization for Economic Co-operation and Development, 以下 OECD], 2020; 独立行政法人日本学生支援機構, 2018; OECD, 2020)。このような背景を受け、異なる文化的背景を持つ学習者同士がインターネットを介して交流することの教育的意義は、ますます高まっている。

こうした動向を受け、本稿では「小噺」に注目する。小噺とは、落語の本題に入る前に話される短い話であり、軽妙さやユーモアを含むものが多い(広辞苑, 2018)。本稿では、北米私立大学の日本語学習者と日本の英語学習者との間で実施したオンラインを活用した国際協働学習交流において、小噺を用いた活動を導入し、その教育的意義を検討する。ユーモアという言葉的・文化的要素を介した相互理解の促進が、学習者にどのような影響を与えるのかを多角的に考察するものである。

2. 背景

2.1 異文化間能力教育の重要性

言語学習の領域においては、学習者に国際的視野を涵養することの重要性が早くから指摘されてきた。そのため、異文化間能力の発達を説明するために多様な理論的枠組みが提唱されてきた。Bennett (2017) の発達の異文化感受性モデル (Developmental Model of Intercultural Sensitivity: DMIS) は、異文化差異をどのように認識するかという知覚構造の発達過程に焦点を当て、心理的側面から異文化受容の変容を説明している。Byram (1997, 以下 Byram) は異文化間コミュニケーション能力 (Intercultural Communicative Competence, 以下 ICC) を提唱し、言語的・社会言語的・談話的能力に加え、態度・知識・解釈・相対化といった異文化理解スキルを含む構成要素を提示している。また、Deardorff (2006) の異文化能力ピラミッドモデル (Pyramid Model of Intercultural Competence) は、態度・

知識・技能から内面的成果を経て外面的成果に至る発達のプロセスを示し、国際教育分野における標準的な参照枠組みとなっている。

こうした理論的議論が多様化する中で OECD（2018）は、国際学力調査（Programme for International Student Assessment: PISA）においてグローバル・コンピテンス（Global Competence）を正式に導入した。この枠組みは、異文化間理解と国際的協働の力を測定可能な教育指標として整理・統合し、国際的に共有されうる比較基盤を提示した点で重要な意義を持つ。

2.2 デジタル国際交流

異文化の尊重や理解は現代教育における重要な要素であり、その実践形態としてオンラインを介した国際的な協働学習の実践が発展されてきた（グラハムほか, 2017）。特にコロナ禍以降、ICTを活用した国際交流は急速に普及し、多くの高等教育機関で導入されている。代表例として、ニューヨーク州立大学が提唱した Collaborative Online International Learning（COIL, 以下 COIL）、欧州委員会（2014）による短期現地滞在とオンライン学習を組み合わせた Blended Mobility、言語学習を主体とする Virtual Exchange が挙げられる。

今回対象とする交流は双方が授業の一部として実施されたものではないが、その構成や目的は COIL の枠組みに準じているため、本稿では「COIL 型オンライン国際協働学習活動」と位置づける。さらに、本交流では日本の伝統話芸「小噺」を導入した点に特色がある。本交流で小噺を取り上げたのは、ユーモア・コミュニケーションが異文化間の緊張を緩和し、共感や相互理解を促す重要な手段であることに基づく。分断が進む現代社会において、こうした学びを通じて若者が異文化間理解を深め、将来的に「笑い」にあふれた平和な社会を築く契機となることを期待し、その趣旨から採用した。

2.3 小噺の教育的特性と背景

小噺は簡潔さと明確な「オチ」を特徴とし、学習者の心理的負担を軽減するとともに、笑いを通じて緊張を和らげ、学習意欲を高める効果を持つ。また、語彙・文法・発音といった言語的要素に加え、表情やしぐさなど非言語的側面への意識も促す。さらに、発表を通して達成感を得られるほか、協働的な創作過程は多様な価値観への理解や共感力を育み、他文化圏のユーモアを取り入れることによって異文化理解を促進する。

こうした教育的特性を背景に、小噺活動は国際的に広がりを見せている。米国ミドルベリー大学夏期日本語学校での導入（畑佐・久保田, 2009）を端緒に、国際交流基金ロンドン日本文化センター（藤光, 2021）、欧州各国の日本語教師会（根本・ブランド, 2022）、米国イェール大学（西村・野崎, 2025）などで教師向けワークショップや実践が報告されている。さらに、国際小噺発表会（遠藤ほか, 2023）、アジア地域での KOBANASHI Contest in Cebu（持田, 2024）、北海道国際交流センターにおける地域住民との交流（畑佐ほか, 2025年8月）など、国際交流や地域連携の場でも活用が進んでいる。

3. 米国イエール大学と Knox の交流実践の内容

3.1 交流の参加者

日本からの参加者は、著者の一人が統括する NPO 法人 Knox English Network (以下 Knox) が主催し、文部科学省や外務省の後援を受けて実施されているオンライン国際交流プログラム「Global Talk」に参加する大学生である。本プログラムには高校生と大学生が含まれるが、本稿で取り上げるのはそのうち大学生の一部が参加した交流である。プログラムは年間約 30 回の国際交流を実施しており、参加者は全国各地から個人単位で応募している。参加費は無料であり、経済的・環境的制約により国際交流の機会を得にくい学生にも広く門戸を開いている点の特徴である。その結果、文系のみならず理系・医学系・農学系など、多様な専攻分野の学生が含まれている。本稿においては Knox より参加している学生を「Knox 生」と呼ぶ。

米国側の参加者はイエール大学において日本語初級 I、上級 II、上級 III を履修する学生であり、授業の一環として本交流に参加している。同大学では 2022 年度より、上記コースの学生と Knox の間で学期中に 2~4 回の交流を継続的に実施しており、初級では主に身近な話題を扱い、上級では社会的関心の高いテーマを取り上げてディスカッションや討論を行い、グローバル市民としての視点を深めている。2024 年度にはこの枠組みに小噺活動を導入し、既存の交流に新たな教育的側面を加えることを試みた。

3.2 2024 年秋学期の実践

2024 年秋学期には、イエール大学の日本語初級 I の 24 名・上級 III の 10 名がそれぞれのコースで、小噺交流に参加し、交流初日にアイスブレイクとして活用することを目標とした。まず、事前学習として、落語家ダイアン吉日や桂サンシャインによる映像資料を視聴し、小噺の構造やユーモア表現を理解したうえで、各自が演じたい小噺を選び、演技を Padlet に投稿した。その後、教員によるフィードバックを受け、囃子や小道具を加えた第二稿を交流用 Padlet に投稿し、段階的に改善を重ねた。

一方、Knox 生は初級相当 23 名・上級相当 9 名が参加し、『みんなの小噺プロジェクト』（畑佐・久保田, 2009) を視聴し、小噺について学んだうえで、各自がオリジナルの小噺を制作し、動画を同 Padlet に投稿した。

両教育機関の学生は、言語文化交流会の趣旨に基づき、学習言語と母語の両方による演技を共有し、双方向的な交流を実現した。Zoom による交流会では、互いのパフォーマンスに対する感想や質問が交わされ、笑いを契機とする自然な対話と共感が生まれ、目標であったアイスブレイクの役割を果たすことができた。

3.3 2025 年春学期の実践

2025 年春学期には、イエール大学日本語上級 II の 21 名と Knox の 13 名が参加し、日米 11 の混合グループによるオリジナル小噺の創作・演出を目的としたプロジェクト型協働活動を実施した。まず、交流前に小噺に関する解説動画や過年度の発表動画を視聴し、構造や「オチ」の工夫について理解を深めた。そして、

Zoom による 3 回の交流を通じて、各グループは脚本制作から発表準備に至るまで協働的に取り組んだ。さらに、イェール大学ではプロの噺家による落語ワークショップと寄席を 2 回開催し、伝統的な語り芸に関する所作や小道具の扱いを体験的に学んだ。

最終発表では、Zoom を用いたオンライン寄席を開催し、元関西テレビディレクター等の外部審査員を招いた審査制を導入した。審査基準には「聴衆をどれだけ笑わせたか」などを設定し、学生の創作意欲と発信力を高める工夫を行った。なお、このプロジェクトは授業成績の 15% を占める評価対象とした。

創作過程においては、交渉・譲歩・合意・協力といった協働に不可欠な表現を意識的に用いることを促し、異なる考えや文化的背景を尊重しながら建設的な意見交換を行う姿勢を養成することも重視した。

4. アンケート結果・分析

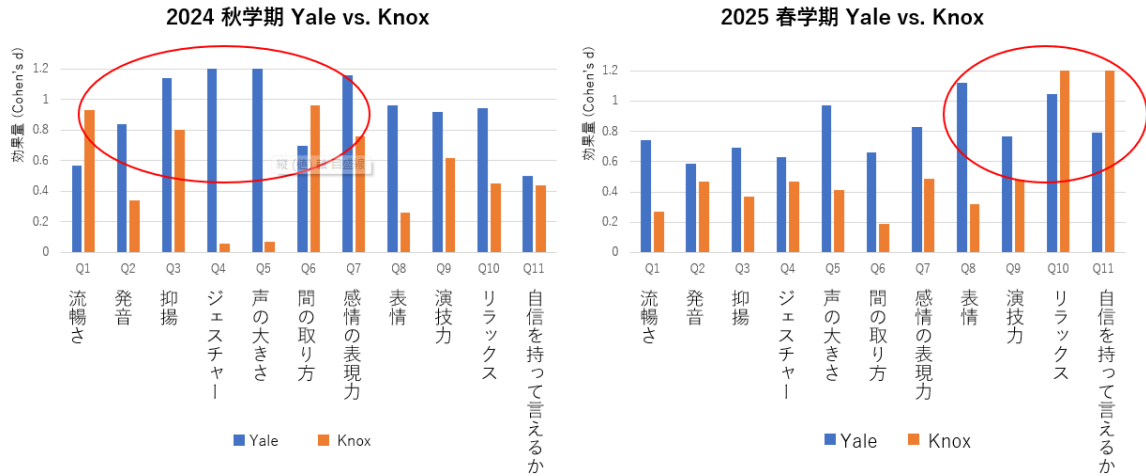
小噺交流活動の効果を検証するため、2024 年秋学期と 2025 年春学期の交流を対象に、定量分析と定性分析を行った。定量分析では、二学期の交流における Pre/Post アンケート計四回分を対象に、流暢さや発音、自信など 11 項目について t 検定より算出された効果量 (Cohen's d) を比較検討した。また定性分析では、両学期の Post アンケート二回分の自由記述回答を対象に、KH コーダーを用いてテキストマイニングを実施した。自由記述回答の内容を分類・抽出し、特徴的な意見や傾向を整理することで、数値データでは捉えきれない学習効果や意識の変化を補足的に捉えることを試みた。

4.1 定量分析

定量分析では、「小噺活動に関して以下の項目についてどの程度自信がついたか」を問う自己評価項目を用いた。具体的には、流暢さ、発音、抑揚、ジェスチャー、声の大きさ、間の取り方、感情の表現力、表情、演技力、リラックス、自信を持って言えるか、の計 11 項目について、1 (全く自信がない) から 4 (とても自信がついた) までの四件法で回答を得た。これまで複数年に渡り、イェールと Knox において約 30 項目の合同アンケートを実施してきたが、年ごとに内容に変更があったため、本稿では両学期に共通している 11 項目に焦点を当てている。これらの項目は既存の標準化された尺度ではなく、Byram の ICC モデルを理論的枠組みとし、本稿の目的に即して著者らが独自に作成したものである。なお、質問文は英語と日本語の両言語で提示した。アンケート項目の全文は付録表 1 に示した。

11 項目について、2024 年秋学期 (Yale: Pre $n = 22$, Post $n = 19$; Knox: Pre $n = 23$, Post $n = 17$) および 2025 年春学期 (Yale: Pre $n = 20$, Post $n = 19$; Knox: Pre $n = 13$, Post $n = 13$) の Pre/Post データを用いて t 検定を行い、p 値と効果量の一つである Cohen's d を算出した。Cohen's d は平均差を標準偏差で割った値であり、数値が大きいほどプログラムによる変化の大きさを示す。本稿では、この効果量に着目し、図 1 に示すように交流別に可視化した。算出に用いた Δ 値・p 値・Cohen's d の詳細は付録表 2 に示す。

図1 交流別効果量 (Cohen's d) の比較



その結果、2024 年秋学期の交流においては、流畅さ、抑揚、間の取り方、感情の表現力などに イェール および **Knox** 双方で比較的高い効果量が示された。一方、2025 年春学期の交流では、表情、リラックス、自信を持って言えるかといった項目において高い傾向が見られた。

これらの定量的な傾向をより詳細に把握するため定性分析を実施した。

4.2 定性分析

定性分析では、KH Coder (樋口, 2014) を用いてテキストマイニングを実施した。2024 年秋学期における自由記述回答の分析では、イェール生からは「learn」「native」「vocabulary」といった語が中心に抽出された。これらは言語学習そのものに直結する語群であり、初級段階における学習関心が、語彙習得や母語話者との比較に強く向けられていたことを示唆している。**Knox** 生においては「英語」「難しい」「交流」「楽しい」といった語が小さなクラスターを形成しており、言語運用の困難さや国際交流への楽しさといった、自身と相手の関わりから派生する実感が語群として表出した。

一方、2025 年春学期の定性分析においては、イェール生・**Knox** 生ともに「project」「friends」「発表」「作り上げる」といった語群が抽出され、個別の学習要素よりも、チームでの創造的な活動や発表のプロセスに価値を見出している様子が確認された。

2024 年秋学期および 2025 年春学期、二つの交流を対象にしたテキストマイニングの結果を図 2、図 3 に示す。

いった創作活動の価値を指摘した。また、「これまでで最も充実していた」との評価も複数寄せられ、活動の深化が確認された。

5. 考察・まとめ

定量分析の結果、イェール大学では小喃を授業内に組み込みながら活動していたこともあり、言語学習への意識や小喃発表に必要なスキルに顕著な効果が確認された。他方、Knox では小喃そのものよりも交流全般に重点を置いて指導を行ったため、表現方法や感情表現といった側面に変化が見られた。

定性分析では、両学期を通じて全般的にポジティブな語群が抽出されたが、特に 2025 年春学期においては協働制作を経て、他者と共に創り上げるプロセスへの意識が イェール・Knox 双方において明確に示された。このことから、オンライン環境においても協働的な創造活動は、言語学習を超えて異文化間理解の促進や相互のつながりの形成に寄与しうることが示唆される。

本稿の結果が示す最も重要な点は、初級段階から積極的に協働学習の機会を拡充し、さらにゼロから共に創造する課題を取り入れることの有効性である。小喃などユーモアを含み、言語的・文化的要素を取り入れた COIL 型オンライン国際協働学習活動は、言語理解と異文化間理解の双方に効果が認められることから、初級の段階から言語教育において積極的に導入すべき実践ではないだろうか。

一方で、本稿における比較データは授業形態が異なるため、解釈には慎重さが求められるほか、時差、言語レベルの差などの活動負荷といった課題も残されている。しかしながら、分断が進む現代社会においてこそ、ICT の利点を活かした創造性の高い国際協働学習活動の積極的な導入を提案し、本稿の結びとする。

参考文献

- 遠藤真理・加村彩・高木三知子・ブランド那由多 (2023). 教師・学習者の共生の場—笑いでつながるバリアフリーの小喃発表会—. 第 26 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (報告・発表論文集). <https://www.eaje.eu/ja/symposium/75> (2025 年 8 月 1 日)
- グラハム智子・田中雅裕・大久保範子 (2017 年 11 月). The Community of Inquiry to Connect Learners Online in Real World Tasks [学会口頭発表]. 全米外国語教育協会 2017 年次大会, ナッシュビル, テネシー州, 米国.
- 新村出(編)(2018). 『広辞苑 第七版』岩波書店.
- 独立行政法人日本学生支援機構. (n.d.). <https://www.jasso.go.jp/>
- 西村裕代・野崎砂織 (2025 年 3 月) 教師のための効果的な小喃指導：小喃ワークショップと小喃活動の実践報告 [学会口頭発表]. 全米日本語教育学会 春季年次大会, コロンバス, オハイオ州, 米国.
- 根元佐和子・ブランド那由多 (2022). 小喃を授業に！教師たちの学び報告. AJE ニュースレター, 69. <https://www.eaje.eu/ja/nl-article/80> (2025 年 9 月 10 日)
- 畑佐一味・久保田佐由利 (2009). 一人で演じる日本語会話：小喃プロジェクトの実践報告. 第 16 回プリンストン大学日本語教育フォーラム論文集, 20–31.

- <https://pjpf.princeton.edu/sites/g/files/toruqfl151/files/pdf/07-hatasa-kubota.pdf>
(2025年8月1日)
- 畑佐一味. (n.d.). みんなの小噺プロジェクト. <https://one-taste.org/kobanashi/> (2025年9月10日)
- 畑佐一味 (2023). 学習者が演じる小噺—国際小噺合同発表会 (KKGH) の活動から見てくるもの—. 世界の日本語教育, 日本語教育学会.
https://www.nkg.or.jp/musubu/assets/20231215_kokusai.pdf (2025年8月1日)
- 畑佐一味・西村裕代・榊原芳美 (2025年8月). 教育ツールとしての小噺の魅力—世界各地からの実践報告：米国での小噺指導ワークショップからの実践例二つ [学会パネル口頭発表]. 第28回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム & 第27回 BATJ 年次大会, キール大学, 英国.
<https://drive.google.com/file/d/1KICFh4gLPjZNtfGyft7hfYD0hWN69k2m/view>
- 樋口耕一(2014). 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展をめざして—』ナカニシヤ出版.
- 藤光由子 (2021). 日本語教育アドバイザーの仕事～「学びの舞台」をつくる～. 国際交流基金日本語専門家レポート
<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/seiou/uk/2021/report02.html> (2025年8月1日)
- 持田祐美子 (2024). 「小噺」を日本語教育に取り入れる取り組みについての一考察：「第1回小噺コンテスト in セブ」の報告. 広島文教グローバル, 9, 49–62.
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I034076364> (2025年8月1日)
- 山本志都 (2022). 異文化感受性発達尺度の開発——日本的観点の導入と理論的整合性の向上. 多文化関係学, 19, 39–59.
- Bennett, M. P., Zeller, J. M., Rosenberg, L., & McCann, J. (2003). The effect of mirthful laughter on stress and natural killer cell activity. *Alternative Therapies in Health and Medicine*, 9(2), 38–45.
- Bennett, M. P., & Lengacher, C. (2009). Humor and laughter may influence health IV: Humor and immune function. *Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine*, 6(2), 159–164. <https://doi.org/10.1093/ecam/nem149>
- Byram, M. (1997). Teaching and assessing intercultural communicative competence. *Multilingual Matters*.
- Byram, M. (2021). Teaching and assessing intercultural communicative competence: Revisited (2nd ed.). *Multilingual Matters*.
- Erdoğan, F., & Çakıroğlu, Ü. (2021). The educational power of humor on student engagement in online learning environments. *Research and Practice in Technology Enhanced Learning*, 16, Article 9. <https://doi.org/10.1186/s41039-021-00158-8>
- European Commission. (2020). Blended mobility and virtual exchange in higher education.
- Global Talk. (2025, August 20). Global Talk 公式ウェブサイト <https://globaltalk-knox.com/>
- Knox English Network, NPO. (2025, August 20). 団体公式ウェブサイト.
<https://knoxenglish.com/>
- O'Dowd, R. (2021). Virtual exchange: Moving forward into the next decade. *Language Learning & Technology*, 25(3), 1–17.

OECD. (2019). PISA 2018 assessment and analytical framework (Chapter 6, Global Competence, pp. 196). https://www.oecd.org/en/publications/2019/04/pisa-2018-assessment-and-analytical-framework_d1c359c7.html

Yip, J. A., & Martin, R. A. (2006). Sense of humor, emotional intelligence, and social competence. *Journal of Research in Personality*, 40(6), 1202–1208. <https://doi.org/10.1016/j.jrp.2005.08.005>

付録

表 1 【小唄パフォーマンス自己評価の調査項目】

Regarding the Kobanashi performance: On a scale of 1 to 4, how confident do you feel about each of the following items before the performance? (1 = not at all, 4 = very much)
小唄の以下の項目に関してどのくらい自信がありますか。(1=全く自信がない、4=とても自信がある)

-
- Q1 流暢さ (smoothness)
 - Q2 発音 (pronunciation)
 - Q3 抑揚 (pitch accent)
 - Q4 ジェスチャー (gestures)
 - Q5 声の大きさ (volume)
 - Q6 間の取り方 (how to use pauses in lines)
 - Q7 感情の表現力 (emotional expressiveness)
 - Q8 表情 (facial expressions)
 - Q9 演技力 (acting ability)
 - Q10 リラックス (ability to relax)
 - Q11 自信を持って言えるか (ability to say with confidence)
-

表 2 【Q1～Q11 の記述統計および効果量】

2024 秋学期交流

Yale					Knox				
Q#	Δ	p-value	Cohen's d	Sig	Q#	Δ	p-value	Cohen's d	Sig.
Q1	0.45	0.07	0.56		Q1	0.70	0.01	0.94	**
Q2	0.54	0.01	0.84	**	Q2	0.31	0.29	0.35	
Q3	0.79	0.00	1.14	***	Q3	0.69	0.02	0.83	*
Q4	1.07	0.00	1.19	***	Q4	0.05	0.86	0.06	
Q5	0.76	0.00	1.19	***	Q5	0.06	0.82	0.07	
Q6	0.63	0.03	0.70	*	Q6	0.65	0.00	0.94	**
Q7	0.94	0.00	1.15	***	Q7	0.65	0.02	0.74	*
Q8	0.90	0.00	0.95	**	Q8	0.25	0.40	0.26	
Q9	0.96	0.01	0.92	**	Q9	0.55	0.05	0.61	
Q10	0.67	0.00	0.92	**	Q10	0.42	0.16	0.44	
Q11	0.34	0.12	0.50		Q11	0.40	0.16	0.44	

2025 春学期交流

Yale					Knox				
Q#	Δ	p-value	Cohen's d	Sig	Q#	Δ	p-value	Cohen's d	Sig.
Q1	0.52	0.021	0.74	*	Q1	0.24	0.506	0.27	
Q2	0.39	0.058	0.59		Q2	0.46	0.243	0.47	
Q3	0.50	0.026	0.69	*	Q4	0.31	0.36	0.37	
Q4	0.43	0.037	0.63	*	Q4	0.38	0.244	0.47	
Q5	0.62	0.004	0.97	**	Q5	0.31	0.307	0.41	
Q6	0.38	0.032	0.66	*	Q6	0.16	0.64	0.19	
Q7	0.54	0.009	0.83	**	Q7	0.46	0.223	0.49	
Q8	0.83	0.001	1.12	**	Q8	0.23	0.428	0.32	
Q9	0.59	0.017	0.77	*	Q9	0.38	0.235	0.48	
Q10	0.96	0.001	1.05	**	Q10	0.92	0.005	1.21	**
Q11	0.66	0.010	0.79	*	Q11	0.93	0.005	1.22	**